

### 授業づくりのキーワード「主体的・対話的で深い学び」

みなさんは、「良い授業とは？」と尋ねられて、思い出される記憶をお持ちでしょうか。

「小学校4年生のときの〇〇先生の理科の授業は楽しかった。先生が面白い冗談を言われてみんなで爆笑した」。「中学校2年生の道徳の時間に、担任の先生が自分の人生経験を語られたことが、今でも自分の生きる指針になっている」。以上のようなエピソードが語られ、その話にうなづくことがあります。授業の記憶と先生の記憶は切っても切れない関係にあり、先生の人間性が大きく影響していると言えます。

「教育」とは「教えて、育てる」と書き、その主語は教師であったり、親であったりするものが常識です。しかし、視点を変えて、「教えられて、育つ」と読んだときには、子どもが主語となります。ある意味、子どもが「育つ」ことに目を向けているのが新学習指導要領の基本姿勢であり、そのキーワードが「主体的・対話的で深い学び」だと思います。

良い授業とは、子ども達に力（資質・能力）をつける授業だという考え方に基けば、授業によって「何ができるようになるか」を明確にすることが大切です。それに向かって、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学習方法を効果的に組み合わせる必要があります。教師は工夫と改善を重ねて授業づくりをしていかなければなりません。そこで重視すべきキーワードが「主体的・対話的で深い学び」です。少し前に「アクティブ・ラーニング(能動的な学び)」という言葉が広まりましたが、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」という言葉をつかいます。この言葉は、特定の指導方法を指す言葉ではなく、授業の質を高めるための授業改善の視点（下記の①～③）として捉えていただければと思います。

- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ②子どもどうしの協働、教職員や地域の人との対話、人生の先輩の考え方を手掛かりに考えることなどを通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科などの特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

#### ○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての本町の取組

現在、各小中学校では、授業のときに必ず「めあて、まとめ、ふりかえり」を入れることに取り組んでいます。黒板に、授業の「めあて」を書き、児童・生徒が見通しをもって授業に臨むとともに、「まとめ」を書くことで学びを確かなものにしていきます。さらに、ノートやワークシートに授業の「ふりかえり」を書かせ、自らの考えを深めたり、次の学びへとつなげたりするようにもしています。この取組は学びの主体性を養うものであり、家庭学習にもつなげる意図をもって進めています。(写真①)

また、中学校区ごとに取組の違いはありますが、授業の中で児童・生徒どうしが関わり合う場面を設け、教え合ったり、学習課題を解決したりするようにしています。他者との関わりによって自分の考えを広げることができることは、学校という学びの場がもつ最大の強みです。そのような関わり合いの中で、伝えること、聴くことの技能が磨かれ、人を信頼し、よりよい人間関係をつくっていこうとする意欲が高められると考えます。(写真②)

今後とも取組を進めていきますので、授業を参観される機会がありましたら、以上のような視点でもご覧ください。



▲写真①



▲写真②

問い合わせ先

教育委員会事務局 総務学事室 TEL：0859-62-0927